

作品名：「止まらない子供たちが轢かれてゆく」

作家名：綾門優季（あやとゆうき）

枚数：七十九枚

登場人物：

※生徒、両親、先生の三役のうち、どれか二、三役を役者は兼任するが、性格には共通点が多い。

♫宮ノ下みかど／西島先生：計算高い、小賢しい、状況に応じてうまく立ち回る

♫佐々木はじめ／佐々木の父：すぐ調子に乗って馬鹿をみる、犠牲者になりやすい、弱気

♫春日井の父／山本先生：野獣、人の話を聞かない、頑固でみずからの意見を絶対に曲げない

♀春日井あやか／女子生徒一／佐々木の母：かんしゃくを起こしやすい、衝動の赴くままに行動する

♀加賀谷のりほ／岡本先生：忍耐が美德だと思い込んでいる、とっさに反応できない

♀女子生徒二／春日井の母／吉野先生：凜としている、何事においても諦念を常に抱いている

あらすじ：

舞台は学級崩壊を引き起こしている、とある小学校。転校直前の春日井あやかは、クラスメイトから言いがかりに近い因縁をつけられ、理不尽な「学級裁判」にかけられる。この「学級裁判」はクラスの中で何かしらのトラブルが勃発するたびに子供たちだけで開催され、カオスな日常を加速させる要因となっていた。劣悪な環境に教師も生徒も適応し進化し続ける中、春日井あやかの両親が、遂に荒れ狂った教室へと乗り込んでゆく。

○本編

○「燃えなかった手紙」生徒、校舎裏

あやか 転校生活は楽しい。都合がいい。気分転換しやすい。せつかく仲良くなった友だちだって、所詮、三日で飽きる。使い捨ての友だちほど日常を彩る存在はない。情性の付き合いをリセットできる機会に恵まれていて、本当にラッキー。だけど、なかにはあたしのひん曲がった性格に早いうちから気づいていて、警戒を怠らない子もいた。転校直前の出来事。

のりほ わたしからの手紙、燃えるごみに出すのはどうかと思うよ。別に思いのこもった手紙ってわけじゃないけどさ、むしろ嫌々、みんなからの代表として仕方なく、ありきたりの痛切なことばを並べただけの雑な手紙だったけどさ、いくらなんでも酷すぎるよ。扱いがずさんすぎない？手紙も、友だちも。

あやか よくみつけたね、のりほちゃん！普段からひとのことを疑ってるからできることだね！

のりほ はぐらかさないで。「もう、みんなに、あ、あえなくなるなんて、さびしいよう」とかいいながら涙を拭いたその手で、「ゴミ箱に放り込んだんだよね？汚い手だよね！」

あやか わざわざ「ゴミ袋を切り裂いてまで真相を暴こうとするのりほちゃんの手と、あたしの手と、どっちが汚いかは考え方次第だよね！

のりほ あやかさあ、結局、どこの学校に行っても似たり寄ったりのことしてきたんだよね？そうでしょ？

嫌いな子の靴を燃やしたりとか、だれの仕業かわからない目に余るラクガキを残したりとか、そういう禍根をこつとあることに刻みながら、学校を転々としてきたんだよね？

あやか みてきたように語るんだね、すごい。

のりほ はぐらかさないで。だれかにチクッてやってもいいんだよ。

あやか あたしに黙ってチクっちゃえばよかったのになー！こういうのはね、先手必勝なんだよ！

あやか わーんーのりほちゃんがー！あたしへの手紙をー！あたしの目の前でー！びりびりに破ってー！ゴミ箱に押し込んだー！ひどいよー！あたしのこと嫌いでもいいけどー！こんなやりかたしなくたっていいのにー！いくらなんでも酷すぎるよー！うわああああん！

あやか なあんで、先生がぎりぎりのところであたしのことを信じてくれたからよかったけど、いま思い返しても、あれはいちばんの修羅場だった。あぶなかった。

のりほ なあんで、回想に浸りたいのはやまやまだと思うけど、

はじめ 本当の修羅場は、これから始まるんだよ。

あやか え？

「あやかのための学級裁判」生徒、教室

はじめ はい、これから学級裁判をはじめます。みんなの代表としてのりほがあやかに送った手紙がゴミ箱に押し込まれていた件なんですけど、だれかを罰しないとおさまりのつかないところまで来てますー！きてますよね？きてるんですよ。これはね、みんなの賛同を得るまでもないことだと思っんですけど、どっちが犯人かって話になると、取捨がつかないわけです。五分五分。あやかが手紙を捨てた張本人だっていうほうと、のりほの手の込んだ嫌がらせだっていうほうとね。どれだけ話をきいてもらちがあかないわけ。証拠がないから。だからー、これ、どっちが犯人だっていうのは、もう、明白なわけだからー、白させればいと思っんですよ。だからー、いまからー、自己弁護してほしいと思っんです。だって、所詮、子供じゃないですかー、僕たち？ほろ出すと思っんですよね、普通。その出したほろを捕まえて、あとはもうね、みんなで袋叩きにすればいいわけです。さっさとね、その場しのぎに考えた言い訳、べらべら喋ってもらえますかー？見破るんで。クラスメイトのみんなで、嘘、完膚なきまでに見破るんで。じゃ、まあ、手始めに、あやかさん、喋ってくださいよ。

あやか え、なにこれ。え、はじめくん、なにがなんだか、

のりほ うちの学校はね、なにか事件が起こると、こうやってクラスメイトのみんなで判決を下すの。

あやか え、だって、さっき、先生がさ、

のりほ 先生はあてにならないでしょ。わたしたちで決めたほうがいいこともあるでしょ。

あやか え、決めてどうするの？

のりほ 罰を下すに決まってるでしょ。

あやか え、決まってるじゃないよ。勝手に決めないでよ。
のりほ あたしが決めたわけじゃないから。

あやか え、だれがこんなへんてこなルール言いだしたの？
のりほ さあ？だいぶまえの卒業生じゃないの？

あやか え、この場にいるひとたちみんな、知らないひとが決めたルールに従って動いてんの？
のりほ だからそうだってさっきから言ってるでしょ。

あやか え、馬鹿じゃないの。なんでだれも止めようとしないの。

はじめ 馬鹿かどうか、学級裁判で決めるんで。いいから、早く喋ってくださいよ。

あやか ええ、頭おかしいよ、みんな！馬鹿ばかりだよ、このクラス！

はじめ さうさと喋ってもらえますか？時間、限られてるんで。

あやか あのさあ、みんな、学級裁判をやるにしても、適切な時期ってあるでしょ？よく考えようよ！
週間後にはお別れ会を開くんだよ！授業の一環で。あたしたちの手で中止にはできないんだよ？

はじめ 言い訳はやめてください。

あやか 言い訳とかじゃなくて！こんなの、どっちが勝っても負けても絶対気まずくなるよ、お別れ会！
致命的だからね。マジで。あたしが、とかじゃなくて、みんなそろって致命的。ねえ、あたしとのりほの個人的な問題でしょ？わざわざこういう場を持って来る必要のない事柄でしょ？

はじめ 必要があるかどうかとも学級裁判で決めるんで。あやかさん、言いたいことはそれだけですか？
制限時間、迫ってますよ。

〇 「学級裁判の成立過程」先生、職員室

山本 あー、もう、うるせー。これで何回目だよ？十何回目？

西島 山本先生、やっぱり、無視するのにも限界があるんじゃないんですか？これだけ苦情の電話来てるよ。

吉野 ちゃんとした証拠、ありませんけどね。学級裁判が行われているっていう、れっきとした証拠。

西島 しょういことしか起きてないから、問題にしにくいのはわかるんですけど。

山本 どちらみち俺たちが動かなきゃいけないとは思うんだけど、下手に派手に動いて子供たちが怯えて、怯えてこんなことやめればいいんだけどやめないままで、巧妙に隠れてやるようになったらなおさら面倒だからな、学級裁判。

吉野 あの、わたしこの学校に来て間もないんでよくわからないんですけど、学級裁判、っていうのは先生たちも公認だったんですか？悪化するまでは。

山本 公認っていうか、推奨はしてないけど、暗黙の了解、っていうかんじだった。悪化するだろうなー、という雰囲気は薄々察してたんだけど。

西島 数年前にうちの学校の体育教師が口にするのははばかられるような体罰をして、おまけに馬鹿な先生だったから手が滑っちゃって、懲戒処分にはなったんですけど。

吉野 あ、それ、ニュースでみたことあります。失明しかかかっていう話ですよ？たしか頭に、

西島 頭に傷が残っちゃって。女の子なのに。しかもその女の子がなんていうか、

山本 生徒たちのあいだではアイドルだったんだよな。悲劇のヒロインっていうか。

西島 山本先生、言葉、古いですよ。悲劇のヒロインって、いまどき使う言葉じゃないですよ。

山本 うるせーんだよ、西島。黙ってるよ。で、そのころから生徒からの不信感が凄くてな。敵しい先生だろうが優しい先生だろうがおかまいなく、こっちのいうことを一切聞かなくなっちゃったんだ。

西島 それで、学級崩壊がたびたび起きるようになってしまいました。進学校なのに。

吉野 わたしが着任したころには落ち着いて授業できていましたけど。

西島 吉野先生が来たころには学級裁判のシステムが普及したあとでしたから。

山本 いつのまにか学級裁判のシステムが、生徒たちのあいだで自然発生していたんだよ。そして、あっというまに浸透した。

吉野 それで、しばらくのあいだは秩序が保たれていたんですね。

西島 風前のともしびでしたけど。

山本 昨年度、その体罰事件に遭遇した生徒たちは、ひとりを残して、丸ごと卒業した。それがシステム崩壊の引き金になったわけだ。ちなみに残ったひとりっていうのが、頭に傷を受けた女の子、加賀谷のりほ。しばらく学校に来ていなかったせいで留年が確定したんだよな。本人はそこまで悪くないとは思っただけ。そういうのは運だからね。

西島 学級裁判はいま、加賀谷のりほを過剰に防衛する法律と化してしまったんですよ。

〇 「あやかか復讐心」生徒、通学路

あやか なんてあたしが袋叩きにあわなきゃいけないの。

のりほ 当然の報いでしょ。だってあやかか犯人なのは紛れもない事実なんだから。

あやか 責められるぐらいならわかる。人望を失うぐらいなら納得できる。でも、こんな、みんなから暴力を受けるいわれはないよ。

のりほ 学級裁判で決まったことなんだからしょうがないでしょ。

あやか しょうがない？あの茶番をしようがないっていうわけ？みんなが露骨にあなたの味方をするあのクスミみたいな学級裁判を、あなたはこれからも支持するわけ？

のりほ 支持してるわけじゃないけど…。わたしだって好きて学級裁判に巻きこまれてるわけじゃないから…。気がついたら、いまのシステムが勝手に整備されて。わたしのせいじゃないよ。

あやか 弁解にもなっていないよ。

のりほ 弁解する気はないけど…。事実を述べたまでよ。

あやか あたしの復讐心、なめないほうがいいからね。絶対に号泣させてみせるから、あなたのこと。

のりほ どうやって？

あやか あたしのお父さん、怒らせると手がつけれないんだからね。

のりほ ああ、結局、人任せなんだ。

あやか 他人じゃないから、肉親だから、人任せじゃない。お父さんの怒りはあたしの怒りなんだ。

のりほ 虎の威を狩る狐、ってやつ？ 虎になれなきゃ意味ないのに。

あやか 職員室の机を放り投げたこともあるんだからね、あたしのお父さん。

のりほ ああ、いま流行りのモンスターペアレントってやつですか。怖い、怖い。

あやか 馬鹿にしているでしょ。

のりほ 馬鹿にしているっていうか、馬鹿だよ、実際？

あやか あとであやまったって知らないからね。

のりほ どんなに酷い目にあつたとしても、あなたにだけは、あやまらないよ、わたし。

ㄏ 「決意する春日井の父」両親、春日井家

春日井の父 駄目だよ。せんせん駄目だ。

春日井の母 またですか。

春日井の父 またあやふやな返答だよ。うちのあやかが傷だらけになって帰って来たってどれだけ切実に訴えても「善処します」「検討します」「これから最善を尽くします」ってあいつらは政治家かよ！もう俺はキレたね。もう職員室に乗り込むしかないよ。

春日井の母 でもあやかはどうせ一週間後には転校してしまうんですよ。

春日井の父 泣き寝入りしろっていうのか？

春日井の母 事態を改善したところでその恩恵は受けられない、って言ってるんです。

春日井の父 利害関係がうんぬんとかそういう話じゃないよ。これはプライドの問題なんだ。

春日井の母 でも、

春日井の父 おまえは口を挟むな。このままこの問題を放置して引越すなんて、後味が悪すぎるだろ？

春日井の母 だからって、もう少し考えてからにしても、

春日井の父 考えてるうちに一週間経っちゃうよ？俺たちに時間は残されていないんだ。鉄は熱いうちに打たなくちゃならない。出すぎた杭はひっこめなくちゃならない。悪い芽は早めにつまなくちゃならない。そうだろう？

春日井の母 おまかせしますよ。言いだすと聞かないんだから。わたしたちが悪い芽にならないように、せいせい気をつけてくださいよ。

春日井の父 わかっているって。

春日井の母 わかってないんだから。

ㄏ 「迫り来る嵐」先生、職員室

山本 参ったな。

西島 どうしました？

山本 春日井あやかの両親、どうもこれから乗り込んでくるみたいだな。

- ああ、あれか。忘れようとしても、こびりついて離れないから。
- 覚えているのに、平気な顔で暮らしているんですか？
- 普段は覚えていることも、忘れてるからね。
- それは、仮面をかぶって暮らしてる、ってわけじゃないんですよね？
- わからないな。仮面をどれだけかぶったところで、すべての仮面は半透明かもしれない。どれだけ巧妙に嘘をついても、ある程度は透けて見えるのかもしれない。
- うまい具合に猫をかぶっていても、所詮いつかはだれかにばれるって言いたいですか？
- 穏やかな猫を自分の外にかぶっているんだか、凶暴な猫を自分の中に飼っているんだか、いつのまにかわからなくなるんだ。そういう瞬間が必ず訪れるんだ。
- それは、なにかの比喩ですか？
- 経験則だよ。紛れもない、事実だ。

○ 「裏切りに次ぐ裏切り」生徒、放課後の教室

はじめ こめん、本当にこめん、なにかもぶちまけるしかないみたいだ、みかどくんいうことに完璧に従って行動してただけだから、僕に罪はないんだ、って言い逃れないと、どうにもおさまりがつかないみたいだ。

みかど 裏切るのか？

はじめ 裏切りたくないからこうしてあやまつてるんでしょ？裏切るつもりならみかどくんに報告しないままべらべらあることないこと喋っちゃえばいいわけだからさ。

みかど 俺に報告しようとしまいとべらべら喋るわけだろ？それを裏切りって呼ぶんじゃないの？

はじめ 事実じゃないことは喋らないよ。事実だけ、あったことだけだよ。

みかど あることないことべらべら喋られたほうがマシだよ。軽薄なぶん、信用できないからな。嘘か本当か判断しかねる。でも、事実の重みをひきずったままで、あったことだけをべらべら喋られたら、だれだつて信じるに決まってるだろ。…聞き逃したけど何？僕に罪はない、とかいった？共犯だろ？

はじめ そもそも学級裁判のシステムを回してきたのはみかどくんわけだし、僕はただ司会進行役を引き受けただけで、

みかど その司会進行役に学級裁判のすべてがまつているんじゃないのか？その場の空気も下される罰も、はじめの胸ひとつで決まるわけだろ？

はじめ そんなこといったって…！僕はみかどくんに渡された原稿を…！

みかど 原稿を？原稿通り読んだのか？頼んでもいない過剰な装飾をほどこして、あやかを追いつみすぎたのはどこのどいつだ？こんなややこしい事態を引き起こすまで。

はじめ みかどくんが何と言おうと、もう先生が総動員で動き始めている事実は変わらないよ。今週中にはみかどくんの家に先生からの殺伐とした電話がかかってくるはずだから。

みかど 覚悟しておくんだな。はじめが正直に告白したように、俺も正直に告白する、ようにみせかけてあることないことべらべら喋ってやるからな！

はじめ それこそ裏切りじゃないか！

みかど 裏切ったのはそっちが先だろ？裏切りの裏切りは表。これは正当な勝負なんだよ。

6 「こどもたちの武器」全員

こどもたちは息を潜めながら逆襲の機会を待ち望んでいました。横暴なおとなたち、という便利な言い回しをして、こどもたちを支配するおとなたちすべてを敵に回すことに成功しました。おとなたちはみんな、昔はこどもたちだったので、こどもたちの気持ちを手におもんばかりでしたが、こどもたちはおとなたちになったことはないので、遠慮は無用です。おとなたちは、もはや正論ですらない一般論を、自分の考えのごとく振り回していました。斧みたいに。こどもたちは耳を塞いで、こどもたちだけが振り回すことのできる武器はなにか、おとなたちの鼓膜を破ることのできる、致命傷になる絶叫はなにか、必死に考えあぐねていました。こどもたちの本能から導きだそうとしていました。答えはなかなか出ませんでした。答えはないのかもしれませんが。でも、こどもたちは単純なので、答えを見出そうとする過程から、逃げだそうとは思いませんでした。

10 「岡本先生、途方に暮れる」先生、職員室

岡本 山本先生は？

吉野 春日井さんのご両親がおみえになられて、いまその応対中です。西島先生も。

岡本 もおとおおおこんなときにかぎってえええええ。

吉野 岡本先生？どうされました？

岡本 解決する気さえ失うような非常にめんどくさいトラブルが起こりまして。

吉野 トラブルって、授業中でしょ？まだ。

岡本 授業も統行困難なぐらいめんどくさいトラブルなんですよーもう、わたしひとりじゃ手に負えないくっ。

吉野 わたし、向かいましょうか？今日は午前中しか授業ない日なんで。手、空いていますし。

岡本 吉野先生が来ても、ねえ…。

吉野 なんです？力不足っていいいたいんですか？

岡本 いや、そういう意味じゃないですけど。

吉野 そういう意味にしかとれませんでしたが。あきらかに気に障る発言でしたよね。

岡本 いえ、男のひとに来てもらいたかったんですよ。

吉野 なんなんですか？今度は性差別ですか？男のひとのほうに頼りになるとか、そういうことを言いたいんですか？

岡本 いや、だから、わたしたちが踏みこみにくい事柄なんですよ。

吉野 どんな事柄でも踏みこんでいくのが先生の職務ですよね？

岡本 そう思って踏みこんだら大やけどしたんですよーもう、教室に戻るのもうんざりなんです。

吉野 いったい何が起ったっていうんですか？

岡本 口にするのも嫌なんですけど…。

吉野 もつたいぶらないでくださいよ。岡本先生がもつたいぶるときって、だいたい大したことないときですよね？

岡本 そんなことないですよ、だって、

二 「夢精事件」生徒、教室

みかど もらしてない？

はじめ (いねむりからさめて) え？

みかど もらしてるよね？スポンに染み、ついてるから。

はじめ もとからだよ、この染みは。

みかど 先生、はじめくんがおもらししてまーす。

はじめ 濡れ衣だよ。もらしてない。大丈夫です。

みかど 精液じゃない？

はじめ ええ？

みかど 精液だよね？カップカピになってるよね、スポンの生地。え、なにこれ、夢精？授業中に夢精？どれだけ爆睡したら授業中に夢精できるの？油断しすぎでしょ。ウケるわー。

はじめ 違うよ、これは、

みかど それとも隠れて自慰でもしてたんですかあ？マスターベーションですかあああああ？

のりほ ねえ、授業中だよ。使う言葉には気をつけてよ。

みかど だって、夢精もマスターベーションも言い換えできないし。夢精は夢精でしょ。

のりほ そうじゃなくてーいや、そういう単語も使ってほしくないけど！みんなのまえで、こんな大声で

…、はじめくんがかわいそうじゃん。

みかど はじめが悪いんだろー。夢精なんてするからー。

のりほ ほらまた言った！たとえしてたとしても！

みかど お、認めた。夢精してたこと。

のりほ 認めてないよ！ねえ、恥ずかしすぎるでしょ、こんなやりかた。さらすっていうか吊るすっていうか、とにかく、せんせんよくないよ。はじめくんの気持ち、考えた？

みかど 凄く考えたからさういいうことしてるんだよ。あえて。

のりほ え？

みかど あ、逃げた。はじめのやつ。

岡本 っていうわけで、いま、はじめくん、屋上で柵を乗り越えようとしてるんですけど。

吉野 それをはやく言いなさいよー

あやか 最悪だ。

はじめ え？

あやか これから屋上に来るたびに、はじめくんが屋上の柵を乗り越えようとしている姿を思い出すのかと思うと、気が滅入るよ。

はじめ 屋上に来なければいいだろ、二度と。それに、おまえには関係ない。

あやか 関係ないあたしのいるところで、そんな醜態をさらさないでよ。

はじめ おまえがいてもいなくても関係ないんだよ。

あやか はじめくんが関係ないって思っても、こうして会話しているだけで、勝手に関係しちゃうでしょ。

あたしはもう、この学校のひととはだれとも関わりたくないのに。

はじめ おまえが勝手に屋上に腰をおろしていたんだろ。

あやか はじめくんだって、勝手に屋上の柵を乗り越えようとしているじゃない。

はじめ 行動するってことは身勝手なことなんだよ。身勝手じゃない行動なんてあるか？

あやか あるよ。この学校のなかに、身勝手な行動があふれかえっているだけで。

はじめ おまえとこれ以上議論する気はないから。はやく屋上から出るよ。面倒なことになるよ。

あやか 面倒？

はじめ サイレンが聞こえてこないか？救急車のサイレン。

あやか 大ごとになりそうじゃん。

はじめ 大ごとにしたくないんだよ。

あやか どうせ未遂でしょ？飛び降りる気は最初っからないんでしょ？なんでそういうめんどくさいことをするの？

はじめ こごでもっともらしい理由を口にしても陳腐なだけだろ。どうでもいいんだよ、そんなことは。どうせ、あとからだれかが勝手に深読みしてくれるんだから。

あやか そんなところまで人任せなんだ。そんなに無責任なのに学級裁判であたしをあれだけ追いつめたんだ。

はじめ あれは、みかどに言われてやったことだから。

あやか 最後の最後まで、人任せ、なんだ。

はじめ みんな多かれ少なかれ人任せなんだよ？

14 「大ごとにする気なの？」生徒

— あれ、屋上に人いない？

— 気のせいだよ。

— 気のせいじゃないよ。ほら、柵、乗り越えてる。いいから屋上みてよ。

— ああ、うん。いる、いる。

— 温度差—反応いくらなんでも薄すぎでしょ。飛び降りたらどうすんの。

- ― 目をつぶる。
- ― ほかにやることあるでしょ。
- ― 助ける？無理じゃん？
- ― 極端だよーほら、みんなに知らせるとか。
- ― えー、大ごとにする気なの？
- ― 大ごとって、だつてこのまま放っておく気？
- ― 放っておいても放っておかなくても、飛び降りるやつはどうせ飛び降りるし、飛び降りないやつはどうせ飛び降りないよ。
- ― そうだけどーそうだけどきー。みもふたもないよー。
- ― 大勢で騒げば騒ぐほどあとにひけなくなつて飛び降りることだつてあるじゃん？
- ― そうだけどー正論だけどーでもでも、ああいう光景を目撃したら騒ぐのが人間として自然な反応なんじゃないの？
- ― あなたにとってはそうなんです。わたしにとっては違うから。騒ぎたかつたら騒げば？
- ― きゃああああ。屋上に人がいるうううううう。
- ― 本当にすぐ騒ぐんだね。ウケるわー。

15 「わたしたちの校舎」全員

先ほどはじめくんがクラスから出ていったときも、ついでに先生が出ていったときも、こどもたちは動揺しませんでした。微動だにしなかったといつてもいいでしょう。はじめくんがみかどくんの駒のひとつにすぎないことは、こどもたちの暗黙の了解になっていました。先生に頼ることをあきらめたのは、おぼろげにさえ思い出せないほど、遠い昔のことでした。

こどもたちはなにも期待していません。サンタクロースの正体は両親だったことがはれたときのよう、期待を寄せていたなにかが、おとなたちの仕業だったと知って、はしこを外されたような気分を味わうのは、もう二度と、経験したくなかったからです。

期待しないこと。依存しないこと。密着しないこと。

自分で自分に言い聞かせなくちゃ。ずっと覚えておかなくちゃ。守り続けていかなくちゃ。

そうしないと、裏切られた経験があまりにも少ないわたしたちは、きつと、たちなおれない。

ずっとまえから、心の中で、体育座りで、震えている。うすくまっつて、怯えている。怯え続けている。

16 「飛び降りる理由」生徒、屋上

はじめ 指がね、切り落とされていく夢をみていたんだ。授業中に。血は一滴も出なくて、痛みは全く

なくて、ただ指という指が宙を舞うんだ。だから奇跡だと思って、神様が「おまえはもうだれにも触れなくていい」って許しをくれたんだと思って、嬉しくなっちゃって、思わず神様を抱きしめたら、女神だったんだ。その女神は僕の性器をおもむろにもてあそび始めて、僕は、むずむずがおさえきれなくなっちゃって、夢精しちゃった。授業中に。夢精。なんて恥ずかしいんだろう。目が覚めると、指の先に少しだけ精液がついてたりして、これから僕は、この手で、何人と握手していくんだろう、何人を抱きしめることになるんだろう、って考え始めると気が遠くなってきたら、教室から逃げているあいだ、両手で顔を隙間なく覆って、号泣するしかなかった。指が顔に触れて、本当にあたたかくて、あたたかいついていかなぬるんだよね、指という指が。生きてるんだっていう証拠を無理矢理顔に押しつけられたみたいで、本当に怖くなってきちゃって。っていうのは、飛び降りる理由になるのかな？ならないよね。ならなくてもいいんだ。言葉より行動。行動に言葉はひれ伏すから。

「凍える檻の中で絶叫はできない」生徒

どうしてこんなに凍えそうなんだろう。

大嫌いだっただ先輩とおんなじことを先輩に訳知り顔で語ってしまったときの壁に頭を何度もぶつけたくなるあの感じ、トイレの壁に「たすけて」という落書きを発見してしまったときの猛烈な共感とこらえきれない吐き気、「卒業しても忘れないでね」と本気で口にしたひとたちが数ヵ月後には本気で忘れようとしていくこと、せんぶがせんぶ、理由のように理由じゃなくて、言い訳の素材にすれば、途端にしなびていってしまう。

通学していると凍えそうだ。校舎の中になると凍えそうだ。先生と喋っていると凍えそうだ。

わたしたちはきつと間違っている。稚拙な暴論を手放したくないだけ。

十年後のわたしたちがいまのわたしたちをみたら、親切に論してくれるに違いない。話のわからない先生なんかより、よほど、理解しやすいやりかたで。だって、十年後のわたしたちもわたしたちなんだから。いまの凍えているわたしたちを、想像もつかないような方法で、通過していったひとたちなんだから。

でも、論されたところで、わたしたちは相変わらず凍えそうだろう。

叫びたいのに叫べないまま、沈黙のやりすこしかたも知らずに、教室は狂いそうになるほどうるさくて、静かな中庭で沈みそうになるだろう。

わたしたちにとって、学校は凍える檻だ。凍える檻の中で絶叫はできない。

18 「絶叫」生徒

だれも飛び降りたくなんてない、だれも飛び降りるところを目撃したくなんてない、だれもだれかを屋上のふちに追い込みたくなんてない、それでも毎日だれかが必ず飛び降りている。昨日も、今日も、明日も、人類は飛び降り続けている、いつの間にか畏にはまって抜け出せなくなるんだ、人があつまればあつまるほどだれかが畏にはまっていても気付かない、だからずっとずっとまっていたかったのに、体育座り

吉野 ちよと！

西島 勝負でもないのに、とか先に言いだしたほうが負けるんですよ。

吉野 ちよと！

岡本 うわー、不愉快な考え方の持ち主だなー。

吉野 ちよと！ー！ねえー！ーいま、窓、窓のほう、

西島 は？

吉野 影、影がいま、影が、ねえ、みえましたよね、影、いま、影が！

20 「はじめのための学級裁判」生徒、教室

みかど これから、はじめくんが屋上から転落したことについての、学級裁判を始めます。飛び降りた日から三日経ったにもかかわらず、はじめくんは、いまだに、目覚める気配がないそうです。

のりほ これ、みかどくんが司会でいいの？そもそもみかどくんが原因なんじゃないの？

みかど あれぐらいで？夢精したことをからかったぐらいで？それぐらいで飛び降りていたら、日本国中自殺者だらけになっちゃいますよ。

あやか 実際そうじゃん。日本国中、自殺者だらけじゃん。今日も人身事故で電車止まってたんだよ、登校するとき。

みかど 口を慎んでくれませんか。いちばん責任が重そうなのはあやかさんなんですから。

あやか あたしが？あたしはなにもしてないよ。

みかど 何故、なにもしなかったんですか？目の前で人がひとり飛び降りようとしていたんですよ？慌てて止めに入るのが自然な反応なんじゃないんですか？

あやか だって、そういう雰囲気じゃなかったし。

みかど 雰囲気とか気にしてる場合じゃないでしょ？

あやか 声、かけづらかったんだよ、なんだか。

みかど ナンバじゃないんですから。

のりほ ねえ、やっぱり、みかどくんのせいだと思う。

みかど だから、夢精のことぐらいで、

のりほ 夢精のことだけじゃなくて。いままでの蓄積があったからでしょ。花粉症みたいに、限界超えたらいきなり発症することだってあるでしょ？夢精のことは、飛び降りる動機にしてはさきやかなことだよ。でも、引き金になるには十分だったんじゃない？たまりにたまってたんじゃないの、ストレス。

みかど (夢精のことをほめかすような、下ネタですよ、というニヤンスで) ストレスだけかなあ、たまりにたまってたのは。

のりほ 怒るよ。

みかど まあ、のりほちゃんのことにも一理はあるけど、

あやか ねえ、あたしと扱いが違うすぎない？そんなにえこひいきする態度をむきだしにしていいの？

みかど (あやかを完全に無視して) でも、僕だけのせいじゃないでしょ。(みんなに呼び掛けるように) ね

え？なんだったら、クラス全員が共犯っていつでも差し支えないんじゃないですか？

あやか だれかに責任転嫁したくて仕方がないだけなんじゃない？

みかど したいですよ、責任転嫁。だって、だれも引き受けようとしなから。責任がぐるぐるまわって、みんなでバターになっちゃえばいいんですよ。

あやか バターになっただけですか？

みかど あまりにもややこしい問題は、単純化すればいいんです。押し入れにありとあらゆるものを押しこんで、掃除したことにするみたいだね。だれかひとりに責任を押しつけて、炭酸水を一気飲みしたような、スカッとした気分。

のりほ 炭酸が苦手なひともいるのに。喉が焦げるような、痛い思いをするひともいるのに。

みかど (半狂乱で) 焦げればいいんだ！焦げ跡が手放せない記憶になるんだ！

21 「嵐、到来」両親&先生、職員室

岡本 だから、何度も乗り込んでこられても困るんですよ。ましてや、はじめくんはいま面会謝絶で、

春日井の父 こっちだって好きで来てるわけじゃないんだよ。でもな、この土地を離れるまで、あと三日しか残されていないんだ、俺たちには。俺の赴任先は沖縄だぞ？わざわざ飛行機に乗ってまで、クレームをつけに来たっていうのか？

岡本 (ボソッと) クレームつけなきゃいいのに。

春日井の父 なにかあったか。

岡本 いえ、なにも。

春日井の母 「クレームつけなきゃいいのに。」って言ったんですよ。言いましたよね、あなた？すみませんね、どうも。このひとがどうしてもっていうもんですから、止められなくてね。ちょっとでも目を離すと止められなくなるんですよ、このひとは。

春日井の父 ぐるぐる考えるだけで行動しないのは人類の敵だからな。

春日井の母 人類代表なんですか、あなた？

岡本 あの、すみません、ご用件を？わたし、この件の直接の担当じゃないんですよ、だから、

春日井の父 (遮って) 担当じゃなくても電話番号ぐらいわかるだろ。

岡本 電話番号？どなたのですか？

春日井の父 佐々木はじめの家の電話番号を、教える。話はそれからだ。

岡本 あの、すみません、個人情報はおちょっと、こちらからお教えできないことになっておりました。

春日井の父 わかった、だれから聞けばいいんだ？

岡本 あの、だれからとかじゃなくて、

春日井の母 ありましたよ、あなた。生徒名簿。自宅も携帯もばっちりです。

春日井の父 でかした。

岡本 (春日井の母に向かって) あなたはだれの味方なんですか！？

春日井の母 だれの味方でもありませんよ。ただただ物事がはやく終わってほしいだけです。一度動き

だした物事は、止まりませんからね。無理矢理せきとめようとしても無駄。巨大なダムからだって水は漏れ続けているんですよ？わたしにできることは、上流でひっかかっている木の枝や、大きな岩を取り除いて、流れようとする力に勢いを与えること。スムーズにすること。流れるだけ流れたあとは、なにも残りませんから。真ッ白です。

岡本 真ッ白にしてどうするっていうんですか。

春日井の母 どうもいませんよ。

岡本 どうもいませんって、

春日井の母 いいんじゃないですか？どうにもならないことをどうにかするのにも疲れたでしょ、いいかげん？(唐突に話を打ち切って)あなた、電話はかかりました？

春日井の父 かかった。切られた。

春日井の母 かけなおせばいいじゃありませんか。

春日井の父 三回かけて三回切られた。

岡本 あからさまに迷惑がってるじゃないですか。やめましょうよ、もう。

春日井の父 大歓迎されるなんてはなから思っちゃいねえよ。大事なのは怒りの表明だろ。

岡本 怒りを表明したところで、結局は無視されちゃうんだったら、あんまり変わらないと思いますけど。

春日井の父 この世にはな、無視したくても無視できない、目を背けられない出来事っていうのが存在するんだよ。

岡本 あの、すみません、無視していいですか？わたし、あなたのことは無視できますから。いいかげん食傷気味なんですよ。堂々巡りの会話。

春日井の父 別にいいよ。俺からの許可は要らないだろ、その程度のことだ。どうせ、おまえなんかにはなから期待してないからさ。

22 「鳴りやまない電話」両親、佐々木家

佐々木の父 またかかってきたよ、どうするっ。

佐々木の母 じゃあ、無視すればいいでしょ。

佐々木の父 無視できないだろ。もう30分鳴りっぱなしなんだぞ。

佐々木の母 じゃあ、モジュールひっごぬけばいいでしょ。

佐々木の父 携帯にかかってきたらどうするんだよ。

佐々木の母 じゃあ、バッテリーぬいておけばいいでしょ。

佐々木の父 家に、直接押しかけてきたら、どうするんだ。

佐々木の母 じゃあ、裏口から逃げればいいでしょ。

佐々木の父 根本的な解決にならないだろ？

佐々木の母 解決しなくてもやり過ごせる方法を模索しませんか？だって、もうすぐこの土地を離れるんですよ、春日井さんのお宅。離れてしまえばごちのものですよ。向こうにいったらいったで新たな問題

が山積みなんですから、あのテのタイプは。怒りが持続しませんよ、どうせ。怒りの矛先が風見鶏みたいにくるくる回転して、目の前にある目障りなものに、とりあえず激怒してるだけなんですから。

佐々木の父 だからって、(口いもる)

佐々木の母 だからって、なんですか？

佐々木の父 無視できないよ。

佐々木の母 無視する勇気がない、の間違いじゃないんですか？無視し続ける胆力はないんですか？

佐々木の父 なんておまえはそんなに堂々としてられるんだ。

佐々木の母 だって、他人事だから。あなたこそ、はじめがこんなことになってるっていうのに、関係ないことにひきずりまわされなくてくださいよ。はじめのことを心配し続けること。これまでの教育方針のミスに落胆し続けること。それだけが、親としての、あなたの責務です。

佐々木の父 おまえ、身も蓋もないな。

佐々木の母 蓋を閉める必要がありますか？

23 「だれがだれだかわからなくなってきた」全員

だれがだれだかわからなくなってきたなあ、おとなたちも子どもたちもおなじことを裏表逆で口にしてるだけなんじゃないのかなあ。

やかに指がふれたからって「熱いっ！」って叫んでるだけじゃ永遠にやかんは動かせないから、どこにふれたところでそれは変わらないから、わたしたちは永遠に沸点を迎えそうで迎えない煮え立つお湯の中で一本でも多くの蜘蛛の糸をつかもうとして、熱い糸を誤ってつかんだったら、ひとよりも大きな声で「熱いっ！」って絶叫して喚き続けること、それくらいしかできなくて、みんながみんな怒鳴り続けるから、意識が朦朧としてくるから、鼓膜に蓋をして目の前の出来事に集中しなくちゃならない。

でも、どれだけ目を凝らしても、たちこめる湯気で一寸先は闇というよりも白だね、真っ白だね、からだの輪郭がさだまらないよ、わたしたちの境界が溶けてゆくよ、溶けだしてゆくよ、わたしたちは、特大のたらいの産湯のなかで、いつのまにか濡れかけている、でも、いったい、せんたい、いつから、いつまで？

24 「わたしたちの合言葉」全員

一寸先が闇なら、一歩も進まなければいい。その場に黙ってうすくまっていればいい。

25 「油断大敵」先生、職員室

山本 まさか、本当に飛び降りるとは…。

西島 油断していたのかもしれませんが。あの事件と今回の事件は全く関係ないのに、無意識のうちに重

ね合わせて、心の中で無根拠に安心していたのかもしれない。

吉野 だから、あの事件ってなんなんですか？

岡本 黙って。

吉野 黙りませんよ。こんなときまづ置いてけぼりなんですか、わたしは。

岡本 黙って。いまは。

吉野 黙りませんよーいまはいまはって、いつになったら話してくれるんですか？先延ばしするのもいいかげんにしてくださいよ。

西島 話しましょうか。話してもいいですよ、別に。でもね、言っておきますけど、あの場にいなかったひとにいくら話したって仕方ないんですよ。話を聞き終わったからといって、吉野先生だけいまいち話題に踏みこめていない、いまの状況は、改善する余地がありませんよ。

吉野 そういう判断は、聞き終わってから、わたし自身でやりますので。

山本 後悔しても知らないからな。俺たちが巻き込まれている蟻地獄に、わざわざ飛び込んでくるなんて。

26 「愚かなこと」全員

他人の経験をきいてそのときのことを想像するほど愚かなことはない。結局は自分の体験しか身に染みることがない。自分の体験の檻の中から逃れる術はない。だから一見関係ない記憶が目の前の出来事にばちばちと繋がってゆくこの現象のことをだれかに説明しようとは思わない。それは自分の中で納得できていればいいことだから無闇に外へ押し出す必要はない。だって自分の愚かさを口にするほど愚かなこととはない。出られない檻の中から腕を伸ばす醜い悪あがきはもう二度と目撃したくない。もう腕を折られたくない。折りたくない。なにも始まらない。なにも終わらない。なのに止まらない。負の連鎖はとどまる気配をみせない。檻の中でうすくまっていたくないならだれかが口火を切らなければならぬ。燃えさかっている火を消すために口火を切らなければならぬなんて愚かなことだろうか？

27 「加賀谷涼について」先生

山本 加賀谷涼っていう生徒が昔いたんだ。俺が担任してるクラスに。そいつがまた生意気でな、授業中に先生が漢字の間違いをしたりするとおもしろおかしく揶揄するわけだ。タイミングも絶妙だから生徒たちは笑う。それで調子に乗っているんな先生に対して物怖じせず失礼な発言を繰り返していくうちに、本気で怒る先生も当然出てくる。そういうときも加賀谷は理性を保ったままで、怒っている先生の顔を指さして爆笑するわけだ。あるとき、新任の先生が加賀谷の物言いに耐えかねて学校をやめた。加賀谷のせいで屈辱的なあだ名が生徒たちのあいだに定着してしまって、授業することそのものに恐怖を覚えるようになってしまったんだ。新任の先生が辞めたという事実はさすがに生徒たちのあいだで波紋を呼んだ。そして、加賀谷涼は、みるみるうちにクラスの独裁者となった。

西島 歴史をひもとけばわかるとおり、独裁者はやがて二度とたちあがれないぐらいの破滅を余儀なくされます。加賀谷涼も例外ではありませんでした。女子生徒のあいだで評判のいい、それなりに話の面白い先生がいたんですが、——僕のことですけど(半笑い)——、加賀谷涼がセンスの悪い冗談でからかったとき、「さすがにそれはないんじゃない?」みたいな空気が辺りを覆って、はじめて加賀谷涼の発言でだれひとり笑おうとしなかったんです。空気っていうものは漠然としているくせに恐ろしいもので、ひとを一齐に突き動かすんですね。その瞬間から、オセロの角を取られたかのように、加賀谷涼をなんとか持ち上げていたひとたちは、加賀谷涼をなんとなくひきずりおろすようになっていったんです。僕が責められているわけでもないのに、身の毛のよだつような思いでしたよ。

岡本 あの事件が起こったのはわたしが授業をしているときでした。加賀谷涼が突然、自分の机を思いっきり窓のほうに向かって投げたんです。振り絞れる力のすべてを使って。机は窓の中央に命中して、ガラスの破片は、教室の中にも、教室の外にも、派手に散らばってゆきました。わたしたちは動揺する暇もなく、絶句することになりました。加賀谷涼が、いましがた自分の力によって開いた突破口、窓の穴に身を乗り出していたんです。すぐに飛び降りるものだと思いついて目をつぶる生徒もいました。でも、そこで、加賀谷涼は固まったんです。微動だにしなくなりました。金属製の彫刻みたい。ガラスの破片に触れた腕から、虫の這うような速度で、血が流れていった光景はいまでも隣の奥に焼き付いています。わたしたちはあつとき、飛び降りることよりも、飛び降りることを一瞬で踏みとどまった感情の動きのほうに、血の気が引いたんです。血を抜かれたかと錯覚したぐらいなんですよ。

28 「あの日の加賀谷涼」生徒&先生、教室

女子生徒1 加賀谷くん、加賀谷くん!

女子生徒2 聞こえてないんじゃないの?!

女子生徒1 え、これって、本当に固まっているの?!

女子生徒2 加賀谷くん、泡吹いてる。

女子生徒1 岡本先生、呆然としている場合じゃないですよ。担任の山本先生呼んでみてください。はやく、はやく!

岡本 (我に返って) わかった、いま、呼んでくる。みなさん、山本先生が来るまでその場に待機。決して動かないでください。勝手な行動をとらないでください。わかりましたね。えっと、それから、

西島 どうしました?(目の前の光景をみて)これは…なにがあったんですか。

岡本 ちょうどいいところに。あああ、でも、なにから話したらいいのか…。

西島 説明を聞いている暇もなさそうですね。

岡本 西島先生、すみません、山本先生呼んでみてくださいませんか、

西島 わかりました、岡本先生はこの場を、

岡本 わかりました、(生徒に向かって)触らないで、加賀谷くん! 一いつ我に返って飛び降りるかもわからないんだから…。一秒後には飛び降りたっておかしくないような位置にいるんだから…。

女子生徒「この教室、もう数分もたないですよ。みんなバクッて。女子生徒の阿鼻叫喚ってこういうことをいうんですね。地獄絵図っていうか。」

岡本「これ以上ややこしい事態が起こったらあたしが加賀谷くんよりも先に飛び降りるわ！女子生徒「落ち付いてください。いまできることから片付けましょう。まずはなるべくはやく加賀谷くんを窓際から引き離して。」

岡本「そうね。あなたたち、悪いけど手伝って。正気を保っているのはあなたたちくらいだから。女子生徒「はい。」

岡本「硬直している加賀谷涼をなんとか動かそうと試みるもの(動かない…。微動だにしない…)。」

山本「おいおい、だれか順序立てて整理して俺に話してくれ、いったいなにが起こっているんだ！」

岡本「遅いですよ。待ちくたびれました。」

西島「岡本先生、職員室に残っていた先生方で、とりあえず救急車の手配と、あと、万が一飛び降りたときのために、体育館のマットを総動員で、」

岡本「救急車はともかく、体育館のマットは焼け石に水っていうか、」

山本「救急車まで呼んだのか。大ごとになるぞ。」

西島「大ごとになったからってなんだっていうんですか？飛び降りたら元も子もないでしょ？」

山本「飛び降りてないじゃないか、実際。割れたガラス代だけで済むはずだったものを、こんな、」

西島「(ひとりごとのように)そういうひとが担任だから生徒が飛び降りようとするんだよ。」

山本「聞き捨てならないな。加賀谷が勝手に自爆しただけだろ。身から出た錆だ。」

西島「こないだも似たようなことを言っ、言い逃れようとしていましたよね？言い訳のレパートリー、少ないんですか？」

山本「は？」

西島「先月のこと、忘れたんですか？」

29 「体罰事件」生徒&先生、体育館

のりほ「(だれかに強く殴られたかのようにいきなり卒倒して)こうなると思ってた、目に浮かんだ、」

西島「目の前で生徒が殴られておきながら、指をくわえてみていたんですよね？」

山本「俺が殴ったわけじゃない。事前に予想できたわけがないだろ。目を離した際に、唐突に、」

西島「三回、殴られていますよね？」

山本「あん？」

西島「のりほさん、三回殴られたっていつてますよ。三回目が致命的だったって。ほら、頭の傷？あれ原因でいま、ああいう髪型なんですよね、のりほさん。いつ殴ったところで殴っただれが殴った、そういうことよりも、優先するところってあると思うんですよね？」

山本「おまえのそういうまわりくどい口調が気に入らないんだよ。」

西島「ねえ、一回目が防げなかったのはわかりますよ。だれにも予想が出来ない。でもねえ、二回目、」

三回目となると。目撃した瞬間に、なんらかの行動に移っていれば防げたんじゃないですか？生徒たちから聞きまじったけど、現場から五メートルと離れていなかったんですよ？

山本 後からなら簡単な問題に思えてくるんだよ。おまえは現場をみてないからそういうことが、西島 みてないですよ、みたくもないですよ、でも口は挟めますよ、いくらでも。クビになったっていうか、事実上追放された先生、もう名前も思い出せませんが、思い出したくもありませんけど、あのひと、いちばん仲良かったのって、山本先生でしたよね？これは、話半分に聞いてもらっていいんですけれど、もしかして、目の前で生徒が殴られても呆然と立ち尽くしていたのは、作戦ですか？微動だにしなかったのって、足がすくんで動けなかったからじゃなくて、この事件はなかったことにできるんじゃないかって、なあなあにできるんじゃないかって、一瞬でも脳裏によぎっているうちに、事態は後戻りできないところまで、

山本 根拠ねえことばらばら喋ってんじゃないかねえぞ！

西島 根拠がないと喋れないならみんな無口。

山本 ……(舌打ち)

西島 だから話半分に聞いてっていったじゃないですか。半分しか信じてませんよ。半分しか。

岡本 ね。きかなきゃよかったでしょ、こんな話。

吉野 きかなきゃよかったけど、わたしに代わって判断しないで。判断力に介入しないで。

岡本 進展しないよね？凹むだけだよ？秘密でもなんでもないんですよ、こんな話は。徒労になることがわかってるから、無益なことでも疲勞困憊したくないから、だれも進んで語ろうとしないだけなんですよ。水が出ないからって満場一致で埋めた井戸を、あなたがわざわざ掘りかえしたんです。誤解しないでくださいよ、恨んでなんかいません。無視し続けることにも疲勞困憊していた、矢先のことでしたからね。根深さだけはすいぶんあるから、また埋めなおすには時間がかかりますけど、必ず、塞がりますよ。それだけのことです。

吉野 塞がったところで、元の形状には決して戻らないなら、それは塞がっていることにはならないんじゃないでしょうか？

30 「窓も扉も塞ぐ」両親、佐々木家

佐々木の母 そっちの窓は塞いだ？

佐々木の父 うん、言われたとおりにやったけど、あの、これって、

佐々木の母 こっちの扉も開かない。この家にはだれもいれないからね。安心して。

佐々木の父 あの、僕たちも出られないと思うんだけど。

佐々木の母 あたりまでしょ？

佐々木の父 出勤しなきゃならないんだけど。

佐々木の母 有給あるよね？せんせん使っていないからたまってるでしょ？使っちゃいなよ、いま。なんのために真面目に働いてきたの？

佐々木の父 有給をいま使いきるために真面目に働いてきたわけじゃないよ。そもそも、会社に連絡できないから、このままだと無断欠勤になっちゃうよ。有給でもなんでもなくって。

佐々木の母 連絡すればいいじゃない。

佐々木の父 電話を使わずに？

佐々木の母 ああ。

佐々木の父 家中の電話の使用禁止令を出したのは君だろ？家電のモジュールも、携帯のバッテリーも、君がどこかに隠しちゃって…。身動きが取れないよ…。

佐々木の母 大丈夫、気を利かせて有給扱いにしてくれるよ。

佐々木の父 そんなことは絶対にないって。今日の午後から大事な商談があるんだ…。

佐々木の母 あなた、この家から一歩も外に出ないことと、ちっぼけな商談と、どっちが大切なの？

佐々木の父 商談だよ。なにも知らないのに勝手に「ちっぼけ」とかつけるなよ。生まれてはじめての、億単位の金が動く商談なんだ。

佐々木の母 あなた、あたしを愛してないの？

佐々木の父 論理の飛躍も甚だしいな！

佐々木の母 酷いわ！会社でもなんでもいけばいいじゃない！（と、佐々木の父を外へ押し出す）

佐々木の父 扉、簡単に開くじゃないか！だましやがって！

佐々木の母 だましてない。中からは簡単に開くけど、外からは絶対に開かないようにしたの。

佐々木の父 一介の主婦が手の込んだ真似を…！おい、開けてくれ、かばんも持たずに放り出されたとどうしようもないんだよ！

春日井の父（佐々木の父の胸ぐらをつかんで）佐々木はじめくんのお父様でいらっやいますよね？

佐々木の父（ものすこいわかりやすいしらはつくれかたで）いや？違いますけど？

春日井の父 わかりやすい嘘ついてんじゃねえよ！

佐々木の父 わかっているなら、尋ねないでよ！

春日井の母 ねえ、このひと、ちょっとまわりくどいんですよ。すみませんねえ、どうも。

春日井の父 どうやら話の通じる相手じゃないみたいだ。

佐々木の父 まだ全然話してないんですけど…。

春日井の父 これは殴るしかないな。

春日井の母 そうですね、そうするしかないですね。

佐々木の父 あなたはどちらの味方なんですか！

春日井の母 味方とか、いないんですよ。だれにも。だれにとっても。大小様々な、あらゆる種類の敵が、

これからもあなたの目の前に、たちはだかるっていうだけで。

佐々木の父 詭弁だ。

春日井の母 詭弁じゃないですよ。いずれ、わかる 때가来ますよ。

佐々木の父 詭弁でしかない。

春日井の父 殴るしかない。

31 「空気読めない奴は退場しろ、って口走る奴が退場しろ」生徒、教室

あやか「KY」っていちはやく死語になってほしい言葉の筆頭ですよ。もうすでに死語だっていう意見もあると思うんですけど、みんなの意識や無意識には色素沈着みたいにごびりついて離れない部分も、まだ若干あるから、やっぱり死語じゃないんですよ。あたし的には。だって、空気をあえて読まなかったり、空気を読む能力がなかったり、空気を読もうにも読めない事情があったり、共有している空気が何通りもあってどれかを選んでどれかを捨てないといけなかったり、掴もうとすると雲散霧消してしまう空気だっであるわけじゃないですか。それより、なにより、場の空気で制御できないんですよ。間違った方向に突き進んでも食い止められないんですよ。そんなものに支配されて、物凄い人数が動いて、取り返しのつかない事態が起こる、その繰り返しにいいかげんうんざりしてきたんです。「空気読めない奴は退場しろ、って口走る奴が退場しろ。」端的にいえばそういうことです。

のりほ わたしはいままでみんなに守られてきた側の人間でした。あのときの体罰で頭を傷を受けてから、先生からの理不尽をこうむらないように、ここにいるみんなが動き続けてくれたこと、それに関しては感謝しています。でもいまとなつては、先生を理不尽に排斥しようとしている。それどころか、なにもかも、やみくもに、排斥しようとしている。そろそろ学級裁判の寿命が到来したみたいです。わたししか提案できる立場にないと思いますので、わたしが宣言しましょう。いまから学級裁判のシステムを廃止にするかどうかをめぐる、学級裁判を始めます。

32 「雨霰のように降り注いで」生徒&先生、職員室

みかど 先生、先生、先生、

山本 なんだよ、宮ノ下。いま先生たちはな、おまえが思ってるよりも数倍は取り込み中なんだぞ！

みかど いやいや、どう考えてもこっちのほうが優先課題ですよ、大変なんですって、教室が、

山本 教室がどうしたんだ、

みかど 加賀谷さんが学級裁判を廃止にする学級裁判を始めるなんて言いだして、票とってみたら、賛成と反対がちょうど五分と五分で、お互いにどれだけ罵倒しあっても膠着状態のまま、紛糾した挙句、しびれをきらした奴らが、窓を、

山本 窓を？

みかど 窓を。

山本 だから窓がどうしたんだよ！

みかど 窓を片っ端から割っていつてるんです。教室中の机や椅子を窓に向かって放り投げているんですよ！三階の高さから机や椅子が雨霰のように降り注いでいるんです。はやく止めないと、

山本 二の舞じゃないか、あのときの。

33 「はじめは濡れ衣」両親、自動車の中

春日井の母 どういうことなんですか？もつと理路整然と説明してください。

佐々木の父 だから、うちのはじめは濡れ衣なんですよ。

春日井の母 濡れ衣ってことは主犯がいるってことですよ？

佐々木の父 みかどですよ、みかど。宮ノ下みかど。こいつがせんぶ悪いんです。

春日井の母 初耳ですけど。

佐々木の父 だれの耳にも入らないように、生徒たちはだれも口にしなかったんですよ。うちのはじめもこれまで口にはしなかったんです、決して。それこそ、はじめが入院しなければ、僕が息子の日記を盗み見ることもなかったでしょう。いや、あれは日記じゃありません、毎日地道に書きつづった、丁寧な遺書のようなものです。これ以上最悪な事態なんてこれから訪れるわけがないじゃないですか。うちのはじめはいまだに意識が朦朧としているんですよ？もう恐れることはなにもないんです。そのみかどって奴がはじめの病室に忍び込んでうちのはじめの息の根でもとめないかぎりはね。いや、そのまえに、こっちから息の根をとめにいってやるんだ、

春日井の母 ねえ、作り話はばれますよ、すぐに。

佐々木の父 作り話かどうか判断してもらうために、こうしていっしょに確かめにいこうとしているんですよ？そのみかどってという人間のクズに、いますぐに会いにいって、あなたの夫が僕の胸ぐらをつかんだように、僕がそのクズの胸ぐらをつかんでやるうじやないですか。そのかわり、お願いできますか、僕はこのとおり腕の節が弱いんでね、思う存分ぶちのめすのは、あなたの夫にお願いできますか？さっき僕を思う存分ぶちのめしたように。

春日井の父 あなたの夫、あなたの夫、うるせえよ！運転の邪魔だ、恨みことをいいたいなら俺に直接話しかける！

佐々木の父 勘違いで僕をぶちのめしたこと、いいかげん謝ってくださいよ、

春日井の父 謝る気はない。おまえの息子も共犯ではあるからな。同情の余地があることは認める。

佐々木の父 僕はまったく関係ないのに、

春日井の父 断定しよう。まったく関係ないと言いきれるほど息子のことを放っておいたのがいちばんの罪だよ。断固として断罪されるべきだ、が、いまはあとまわしにしてやろうじゃないか。沖繩に行くのは明日。今日がラストチャンスなんだよ。俺にとつて。

34 「みかどくんは極刑」生徒&両親、教室

佐々木の父 ここが宮ノ下みかどくんがいる教室で間違いないですか。

みかど 宮ノ下みかどは僕ですけど。

春日井の父 この腐れ外道があああああー(と、宮ノ下みかどを壁に叩きつける)

みかど なんなんですかいきなり！なんの根拠があつて

春日井の父 根拠とかいちいち並べてたら怒りが収まっちゃうだろうがあああああー！

みかど 無茶苦茶だよ、このひと！

のりほ あ、すみません、いま学級裁判中なんで、生徒以外のかたはいったん教室の外へ、春日井の母 あなたねえ、わたしたちが簡単に引き下がると本気で思ってるの？

のりほ 思ってませんけど、便宜的に言っておかないと、わたしが一応司会なので、

あやか あああああ、いらつくー！あなたのそういう曖昧な態度が事態をややこしくしているの！飛んできたパンチは自分の胸でしっかり受け止めなさいよーのれんに腕押しもたいがいにしなさいよー出ていってください、学級裁判はあたしたちが唯一腰を落ち着けることのできる聖域なんです！

佐々木の父 すみません、じゃあ、学級裁判終わったら連絡いただけますか、そのあとにあらためて怒鳴り込みに伺いますので、

春日井の父 この腐れ外道がああああー！と、佐々木の父も壁に叩きつける

佐々木の父 ひいひいひい、ごめんなさいひいひい、余計なトラブルはごりごりなんですうううう、バクシそうなんですうううう、あたかもからでもごころもキャバオーバーなんですうううう！

春日井の父 ちっちゃえキャバだな、おい。スモールアスホールな野郎だとは思っていたが、器もちいせえとはな。

春日井の母 あなた、他のひとたちはわたしがなんとかしますから、そいつを思う存分。

春日井の父 おお、そうだった、悪い、悪い。(と、次の瞬間、みかどの腹を素早く殴る)

みかど くふう。

佐々木の父 公開処刑！？

のりほ ちよとやめてください、許されると思ってるんですか！

春日井の父 許されないことをこれまで地道に積み上げてきたひとにいわれてもねえ。説得力が微塵もないねえ。びくともしないねえ。

春日井の母 あなたたち生徒にはわたしからみっちり道徳つてものを仕込んであげますから。

あやか こんなことやってるひとたちから道徳を教わっても、それこそ説得力がないですよ。

佐々木の父 確かに。

春日井の父 黙れや。(と、次の瞬間、佐々木の父の腹も素早く殴る)

佐々木の父 くふう。

のりほ はじめくんのお父さん、そんなに悪いことしてないのに…。

あやか 自業自得。親が親なら子も子。かえるの子はかえる。はじめくんの親の顔がみたいと前々から思っていたけど、なんてことはない、はじめくんにそっくりだ。ははは。笑える。

佐々木の父 笑わないで…。こつちを見ようとししないで…。

あやか みんな、だれかに凄く良く似ているみたいだ。みんな、だれかにとつての鏡なんだ。みんな、だれかからもらった屈折した光を、乱反射して突き進んでいるんだ。目がつぶれそうだ。視界が痺れる。

春日井の母 ねえ、外で倒れているひとがいるんですけど。

春日井の父 いま、それどころじゃないんだよ。

春日井の母 放っておいたら死にますよ？

春日井の父 死なないだろ。物事を大げさに言うのはおまえの悪い癖だぞ。

春日井の母 大げさじゃないですよ。頭から血を流して倒れているひとがいるんです。ほら、みなさん、

外をみようとしてくださいよ。

佐々木の父 外をみている余裕なんてないですよ。この教室のなかだけでいっばいいっばいなんです。いまにもはちきれそうなんですよ？

みかど 机か椅子が当たたらたんじゃありませんか。こい、二階ですから。当たったら大ことになることくらい目に見えてますよね？こうなるかと思って、職員室に先生、呼びに行ったのに、せんせん来ないし、変なひとたちは乗り込んでくるし、こういう事態が防げないんだったら、救急車待機させておけばいいんじゃないですかね、ずっと。無茶なこと言ってますかね？あたりまえのことじゃないですか？

あやか みかどくんが招いた事態でしょ、もとはといえば。みかどくんがいちばん悪いんでしょ、学級裁判の手綱も握れないのにリーダー気取りでさあ。

みかど はじめを追い込んだのは俺だよ。認めていいよ、じゃあ。でもさ、俺、そんなに悪いか？自分で自分のブレーキも踏めないひとたちの責任まで、俺に押しつけられても、それはお門違いだからね。

のりほ 吉野先生じゃないですか。倒れてるの。吉野先生がいちばんの被害者なんじゃないですか。このなかでいちばん関係ないひとがいちばん酷いとぼっちり受けてますけど、それに関しては罪悪感とか、特になんですか？

あやか いちばんの被害者はわたしだから。だから謝られないまま、沖繩に行くんだからね。このもやもやは一生、晴れないんだからね。

のりほ 被害者意識、強すぎるんじゃない？

佐々木の父 僕だつて、せんせん悪いことしてないのに、なんでこんな目にあわなきゃいけないんだ、

春日井の父 おまえはどうでもいいわ。

佐々木の父 どうでもいいのか…。

春日井の父 それよりだれか救急車呼んだ？呼ぶべきだ、呼ぶべきだ、つて、だれも呼ぼうとしねえじゃねえかよ。

春日井の母 そういうあなたこそ呼ばばいいじゃないですか。

春日井の父 (みかどと佐々木の父の胸ぐらをつかみなおして)俺はほら、両手がふさがってるから。

のりほ 説得力ないなあ。だれの話も真面目に聞こうと思えないなあ。

あやか 学級裁判の判決、はやく言い渡してよ。ラチがあかないよ…。

のりほ ああ、はい。じゃあ、あの、みかどくん、極刑で。

みかど あれ！？そういう学級裁判だったけ！？学級裁判を廃止にするとかいってなかったけ！？

のりほ それはみかどくんが職員室に行っているあいだに終わっちゃったから。廃止に決まったよ。

みかど え、廃止になったんだしたら、これはなんなの。

のりほ 最後の学級裁判だよ。はじめくんを追い込んだみかどくんに、どういう罰を与えるのか、それを決める学級裁判を、最後の学級裁判にしようっていう、結論が出たんだ。

みかど え、都合良くない？いままでのりほのこと守ってきたよね？

のりほ そのことでどれだけ迫害されてきたかと思ってるの？他のクラスのひとたちだって、みんな知ってるんだよ、もう。暗黙の了解で、それとなく無視されてるんだよ、毎日。総合的にみたら、せんせんマイナスだからね。そういうところまでケアしてはじめて「守ってる」っていうんじゃないの？

みかどのりほはなにもしないじゃないか。なにもかもがうまくまわるわけがないだろ。なにもやっただとがないやつは、手一杯になったときにどれだけのものを犠牲にしなければならないか、わからないんだ。

佐々木の父 あ、お取り込み中のところ申し訳ないんですけど、そろそろ救急車を呼ばないと…。

のりほ (佐々木の父を無視して) みかどくんは追放処分になりました。

みかど え、追放？追放って？

のりほ 転校するか、ひきこもるか、ですね。

みかど え、そんなの、自分の意思でどうにかなることじゃないでしょ？

のりほ ひきこもるくらい、自力でできるでしょ？

みかど は？普通に学校来るよ？

のりほ でも追い出すよ？

みかど でもクラスに入ろうとするよ？

のりほ でも追い出すよ？

みかど でも自分の席に着こうとするよ？

のりほ でも追い出すよ？

みかど でも追い出されないように抵抗するよ？

のりほ そしたら窓の外に放り出すよ？

みかど はあ？

のりほ はじめくんの二の舞だよ？

みかど 冗談だろ？

のりほ 二の舞だよ？三の舞でも四の舞でも、ぜんぜん大丈夫だよ？金輪際、反省する気はないよね、みんな！？

35 「99パーセントの出来事は語られない」全員

99パーセントの出来事は語られない。新陳代謝しない。砂埃にもならない。砂。ただの砂。つかもうとしてもにぎろうとしても指と指の間から容赦なくこぼれおちていく砂。たとえば加賀谷涼が学級裁判の創始者だったこと。加賀谷のりほを守るための苦肉の策だったということ。加賀谷涼と加賀谷のりほは小さいころから寝室を共にしていたこと。両親が油断しているのをいいことに、両親が寝室で人知れずやりあっているようなことを、加賀谷涼と加賀谷のりほも人知れずやりあっていたこと。同じ合っていたこと。加賀谷涼は、加賀谷のりほを自分の手の中に収めたいがために、自分の手の届く檻の中に閉じ込めたいがために、学級裁判を普及させようとしたこと。その事実はだれにも知られないまま、システムだけが腐りかけた水たまりのように残ったこと。沖繩に旅立つ日、春日井あやかの視線の先に学校は存在しなかったこと。退院した日、はじめが生涯で唯一の大掃除を自分の部屋で行ったこと。はじめが五十年後にゴミ屋敷の主になっていること。はじめが亡くなる日、大量のゴミに紛れて亡くなるまで書き続けてい

た大量の日記もだれにも気づかれずに処分されてしまうこと。その日まで、はじめの日記は、毎日地道に書きつづった、丁寧な遺書のようなものであることに変わりはないこと。みかどの人間性がいちばん変わらないままだったこと。どこにいっても、独裁と圧政と復讐と逆襲のどれかにあてはまるような人間関係を築いて、そのたびにいちばん痛い目をみるのはみかどだったこと。66 パーセントの出来事は語られない。語られない出来事は鱗粉の舞わない蛾のようなもので、注目されない害虫ほど可哀相なものはない。それでも、それは、決して無害ではない。きらびやかでもない。埋葬もされない。腐らない。空気を激させるものであることに変わりはない。

36 「血を吸わない蚊のようなもの」生徒

あやか 転校生活は楽しい。都合がいい。気分転換しやすい。立つ鳥あとを濁さず、あとは野となれ山となれ、どちらにしてもあたしにこれといった影響はない。だったら唾を吐いて、これまで歯を食いしぼって耐えてきたいまの環境を、徹底的に汚すだけだ。汚せば汚すほど、次に飛び移る環境がクリーンなものに思える。あたしはこれまで数多くの忠告を浴びてきた。けど、そのどれも従おうとは思わなかった。そういう忠告を送ってくる輩は、あたしにとって、耳元でぶんぶん飛びまわっている、血を吸わない蚊のようなものだ。うざりたいけど、実害はない、ただただ速やかに衰えてほしいだけの存在。そういう存在に唾を吐いて、すぐに逃げるのでできる転校生活は、本当に、心ッ底、楽しいiiiiiii！

みかど よう。久しぶり。やっぱり沖繩は6月になってもまだまだ暑いね。
あやか あれ？

みかど (客席に向かって)本日より、沖繩の、この学校に転校してきました、宮ノ下みかどといいます。よろしくお願ひします。

37 「プラスマイナスゼロ」先生

山本 クソガキを追い出しても追い出しても後から後から入ってくる。モンスターペアレントも後から後からわいて出てくる。めまいがするよ。他人に噛みつく暇があったら、自分の子供を叩き直すほうへ、どうしてエネルギーを注がないのか。理解できないね。想像力が働かないよ。

西島 僕はわかりますけどね。

山本 ああいう頭のねじが数百本抜け落ちた、公害以外のなにものでもない親たちの肩を持つっていうのか？

西島 肩を持つっていうか、僕自身、職員室に乗り込んだこと、あるんで。

山本 乗り込む？おまえ、教師じゃないか。職場に出勤するのはあたりまえのことだろう？

西島 そういうことじゃないんだよなあ…。僕、これでもひとの親なんですよ。息子がいじめられましたね、こないだ。殴り込みに入ったんです、息子の通う小学校に。

山本 ……は？

西島 いけませんかね？あまりにもひどかったんで、担任の教師の態度が。

山本 いや、だっておまえ、散々苦しめられてきたじゃないか？ぎゃあぎゃあわめく親と子に挟まれて、耳を塞いできただろ？

西島 だからといって、息子がいじめられたときに、泣き寝入りする理由にはなりませんよね？

山本 なるよ。

西島 なりません。自分を納得させる言い訳になるだけです。僕は納得できませんでした。いけませんかね？殴り込まれたら、別のところへ殴り込まないと気が済まないでしょ？あたりまえじゃないですか。目には目を、歯には歯を、って、間違ってるようですけど、心の動きとしては正しいんですよ。自分のなかでプラスマイナスゼロにしないと、毎日、安心して眠れませんからね。

山本 プラスマイナスゼロなんて無茶な話だよ。数値化できることじゃないんだ。秤に載せて、どっちがあがった、なんて比較はできないんだ。あやふやな実感に頼って暴走するかぎり、プラスマイナスゼロになんて辿りつけないよ。辿りついたとしても、それは一瞬で過ぎ去るまやかしてしかないんだ。

西島 その一瞬に賭けないと前に進んでいけない気持ち、わかりませんか？

山本 わからないな。

西島 だから山本先生は思考回路が停滞しているんですね。

山本 上司に浴びせる言葉かよ、それが。

西島 吉野先生、学校辞めるらしいですよ。学校辞めるっていうか先生辞めたいですね。椅子が上空から降り注いでも、先生辞めないっていうのも、なかなか厳しいですよ。退院したら実家帰るみたいですよ。そして山本先生みたいな先生は、ずっと居座り続けるんですけど、定年退職まで。嫌みのひとつも言いたくありませんよ。

山本 俺は関係ないだろ、俺が椅子を投げたわけじゃない。

西島 山本先生って、どんな事故があっても、一生救急車呼ばないんでしょうね？

88 「わたしたちは合言葉を捨てて」生徒

一寸先が闇でも、一步も進まないわけにはいかない。その場に黙ってうすくまっていれば、爪先から腐り始めるだろう。走り続けなければ、そのまま、腐り続けるだろう。立ち止まるわけにはいかない。横断歩道のない道でも、速度を落としてはいけない。足をすくませてはならない。わたしたちのなかのだから必ず、不意に飛び出してきた車に轢かれるだろう。あるいは、知らず知らずのうちに、車を運転する側にまわってしまったって、不意に飛び出てきた子供を轢いてしまうだろう。避けられない悲劇だ。繰り返されてきた喜劇だ。それでも、わたしたちは、止まらない。信号の色はわたしが決める。わたしがいいというまで、すべての色は青色だ。すべての風は追い風だ。すべての道は滑走路だ。全力で走っていれば、いつか飛べる日が来る。いつか墜落するとしても、飛んでいるあいだは、君は自由だ。みわたすかぎりの青い空が、進め、走れ、立ち止まるな、と、君の背中を押してくれる。

わたしからのおねがいはひとつだけだ。飛んでいるあいだは、せつたいに、止まらなくてくれ。轢かれた子供たちの骸が、君の真下で、腐り果てていたとしても。

止まるな、止まるな、止まらない子供たち。風を素肌に、浴び続けるかぎり。

39 「だれも教えてくれない」先生

教え続けることが苦痛を伴うものだなんて、だれも教えてくれなかった。教えたことはすべて自分にはねかえってきて、口にてきることとはみるみる少なくなっていく。教え子の数は年々増えていく。忘れてゆくひとの数とそれはイコールだろう。覚えていてもらいたいわけじゃないのに、みつめ続けることもたちの顔をみつめかえすと、これだけみつめられていたところで、こいつらの網膜に刻まれることはないんだ、残像になる価値も自分の顔にはないんだ、と、みるみる卑屈になってゆく。それでも、教室の空気に吸収されてしまう言葉を、今日も放つ。喉が焼ける。声帯が焦げ始める。視界が煙に覆われて、一寸先もかすんでゆく。呼吸できなくなる日は近いようできて、案外遠い。呼吸できなくなるまでわたしたちは教え続けるだろう。わたしはずっとまえから呼吸したくない。いつから呼吸したくなかったのか、思い出すことができない。そんなことはだれも教えてくれない。だれかに教えられるようなことではなかったんだ。

40 「そして最後に心臓が残る」全員

出来事はなにも起こっていない。

脱臼しているだけ。噛み合っていないだけ。触れたつもりになっているだけ。

擦れ違っさえないから擦り傷もできない。

矛先があさっての方向をむいているから切り傷もできない。

わたしたちは凍傷にかかるだけ。

かじかんだ指がぼろぼろと落ちてゆくだけ。

だれにも触れられない腕を放置するだけ。

あらゆる体の部位がぼろぼろともげてゆくだけ。

そして最後に心臓が残る。

わたしたちにてきることとは、その心臓をあとかたもなく踏みつぶすことだけ。

それだけ。それだけのために、今日も、わたしたちは地団太を踏む。踏み続ける。

(了)